

## 韓国との国際交流の一例 - ソウル大学校看護大学との学生交流 -

桜井 礼子 Reiko Sakurai, RN, MS

大分県立看護科学大学 広域看護学講座 保健管理学 Oita University of Nursing and Health Sciences

Gerald Thomas Shirley

大分県立看護科学大学 人間科学講座 言語学 Oita University of Nursing and Health Sciences

2001年5月23日投稿, 2001年6月12日受理

## キーワード

国際交流、学生交流、韓国、看護学生

## Keywords

international exchange, student exchange, Korea, student of nursing

## 1. はじめに

これからの看護職の活躍の場は、地域を越え、国を越えて広がっていく。このような時代に対応するために、本学では「国際看護学」講座を置き、看護教育や看護活動の国際比較について教えると同時に、学生交流プログラム等を展開している。その一環として、ソウル大学校看護大学と1999年9月より姉妹校を締結し、2000年7月に第1回の学生交流プログラムをスタートさせた。

本稿ではその学生交流について報告する。

## 2. 学生交流の目的と概要

学生交流は、(1)日韓の医療・保健システムを理解すること、(2)日韓の文化および生活習慣を理解すること、(3)国際的な視野を広げること、(4)日韓の看護教育システムを理解すること、(5)看護職の活動の実態を知ることが目的に実施されている。

第1回の学生交流は、夏休みを利用して行われ、本学からソウル大学へは2000年7月21日～30日の10日間、学生5名、教員2名、ソウル大学からは8月6日～13日の8日間、学生5名、教員1名が訪問した。

交流プログラムの主な内容は、学生、

教員を交えた歓迎パーティ、意見交換会、保健・医療施設の見学、さよならパーティである。両国で訪問した保健・医療施設を表1に示す。

学生交流の費用は予算化しており、学生は費用の一部を負担することとした。

## 3. 学生交流を通して学生が学んだこと

本学の学生は、2年次に「国際看護活動論」についての講義を聞いているが、事前には韓国の保健・医療

表1 学生交流プログラムで訪問した保健・医療・福祉施設

韓国で訪問した施設
・ソウル大学病院およびその付属研究機関
・三星メディカルセンター
・リハビリテーションセンター（延世大学病院）
・ソウル市江北区保健所
・産後ケアセンター
・南楊州市保健所
・保健診療所（保健診療員が開業している）
日本で訪問した施設
・大分県立病院
・大分記念病院
・湯布院厚生年金病院（リハビリテーション中心の病院）
・宇佐高田保健所
・わたなべ助産院
・百華苑（老人保健施設・訪問看護ステーション）
・パルクラブ（障害者の授産施設）

システムについて簡単な情報提供を受けているだけである。今回のプログラムを通して、学生の主な学びおよび印象などについてまとめる。

(1) 保健診療員 (Nurse Practitioner)

本学の学生にとって最も印象的だったのは、ソウル市に隣接する南楊州市の農村地区で活躍している保健診療員であった。保健診療員は、看護師としての経験と一定期間の教育を受けた後に与えられる資格であり、決められた薬ではあるが処方することも可能であり、独立して保健診療所を開いている。ここの保健診療員は、約1000人の住民を担当し、診療所内に住居も構え保健センターを開業し、24時間体制でその地区の住民の健康を守る役割を果たしている。ここでの研修は、ただ話を聞くだけでなく、実際に高齢者の家庭訪問に同行することができ、看護職と対象者との関わりから地域環境と住民のニーズを実感し、看護職の役割について理解することができた。また、ちょうど夏休み期間で学童期の子供たちの健康教室も開かれており、保健診療員の活動が全ての住民に対して行われ、ヘルスプロモーションの考えをベースにその活動が多岐にわたることを実感した。学生は自律し専門性をいかして地域に根ざした活動をしている保健診療員をととても魅力的にとらえられていた。また、韓国での看護職の専門性と予想以上にその地位が高いことを感じたようである。

(2) 日韓の保健・医療施設の違い

韓国では、急性期を中心とした医療施設としてソウル大学病院、三星メディカルセンターを訪問した。ここでは、最先端の医療と研究を行っており、画像転送システムや電子カルテなど学生が初めてみるものであり、驚きをもって見学をしていた。

また、産後ケアセンターは、日本にはない施設である。病院で出産を終え出産数日後に退院した母子が過ごす施設で、母親は産後の体調を整えると共に、子供の世話のしかたなど様々なことを学ぶ施設である。これは韓国の習慣では、分娩後の母親は約1ヶ月は家庭にいて他に世話をする人がいてゆっくり子供の世話をしながら過ごすことが普通であった。しかし、都市部で核家族化が進み、家庭では従来のような環境が準備できなくなった結果できた施設である。日本にないこの施設は、学生には非常に合理的な施設とうつり、日本にも必要な施設ではないかと考え興味深かったようである。

大分では、韓国の学生といくつかの施設と一緒に

見て歩く機会をもったが、本学の学生にとっても初めて訪問する施設が多く、関心が高かった。韓国の学生が「老人保健施設を見学してその設備が整っていることに驚き、日本の高齢者の対策がすすんでいるとの印象を持った」ことや、授産施設を見学して「公的な補助を受けてこれだけの施設があることに日本は豊かである」と感じたことから、日本と韓国の違いに本学の学生が改めて気づいたとのことであった。

(3) 両国の比較から学んだこと

本学の学生は、日本の同じような施設を見学したこともなかったし、日本の現状もよく理解していなかったこともあり、訪韓当初は韓国のシステムはただただ素晴らしいとの印象が強かったようである。しかし、施設を見学するだけでなく、病院や地域で活躍する看護職が働く姿に触れ、直接話を聞くことや、対象を中心として生活や環境の違いに視点をおくことで、両国でどのような看護が提供されているか理解を深めていった。そして、日本と韓国を比較して考えられるようになり、韓国の学生の視点が加わることで日本の現状を再認識し、共通する看護の役割に気づくことで、さらに学びが深まったと考える。

また、学生は、その国の看護を理解するためには、社会、政治、経済、教育など文化的な面で幅広い知識が必要であり、保健医療システム、疾病構造など看護に影響する様々な要因に目をむけることが重要であることにも気づいている。さらに、日本にないシステムや看護職の活躍を、これからの日本での看護職の役割の広がりや可能性としてもとらえていた。

(4) コミュニケーション

今回の韓国でのプログラムでは、休日となる日が3日間あった。学生はソウル市郊外まで足をのばし、寺院や博物館の見学、またソウル市内の市場やショッピングセンターでの買い物など、韓国の歴史や現代の若者文化の一端を経験することができた。本学の学生は「韓国では日本の文化に触れる機会は多いらしいが、それに比べて日本では韓国の文化に直接触れる機会が少ない」との感想を持ったようである。

学生の共通語は英語で、日本の学生は、はじめのうちは英語の聞き取りもままならない状況であったが、身振り手振りも交えながらお互いにコミュニケーションをとっていた。学生は「韓国の人々に触れ、英語や韓国語は十分ではなくても意思疎通はできた。同じ人間同士で話すときには相手に何かを伝えようとする意思や気持ちがあれば、それが何語であろうとあまり問

題ではないということを実感した」と述べており、コミュニケーションをとりたいという気持ちと積極性が一番大事であることを実感したようである。しかし、その一方では「同じ看護を学ぶ学生として、どのような内容の勉強しているのかといった専門に関する話は、語学力の問題もあり十分には意見がかわせなかった」との反省や、「国際社会での共通語としてかかせない英語での会話を身につけることは今後の課題」とも述べており、語学力の必要性も痛感したようである。

#### (5) 学生の学ぶ姿勢

韓国と日本の学生では、学ぶ姿勢に違いを感じた。韓国の学生のほうが、自律しており学ぼうという姿勢が強いと感じた。何事にも関心をもち、自分の意思をはっきりと表現することができており、日本の学生も「大分の施設訪問に同行し、韓国の学生が質問をしているのを見て、その積極性に驚いた」との感想を述べていた。これは自分たちが学生の代表であるという役割意識とプライドにあるのではないかと感じた。

国際交流は異文化の中に自分の身をおき、人間対人間としての触れ合いからスタートするものであり積極性をもつことが大切である。海外に行くと生活習慣の違いや言葉の壁といった様々なストレスにさらされることになり、その中で力を発揮していくことは難しいことではあるが、日本の学生にもそれをはねのける気力と体力があってほしいと感じた。

### 4. 学生交流の評価と今後の課題

#### (1) 学生の人数と構成

学生の参加人数は、訪問施設の受け入れ等を考えると5名程度が妥当であろう。また、学年では、本学は3年次生を選抜した。同じ学年であるため連帯感が強くメンバー同士のコミュニケーションがよくとれ、お互いの知識を共有しあいながら学びを深めていった。一方、韓国からの学生は、1年～4年次までの編成で3年生が2名であった。3～4年生はリーダーシップを発揮し質問も積極的であり、しっかりと専門的な知識を吸収していた。1年生はまだ看護についてほとんど勉強をしていないとのことであったが、このプログラムに参加し「看護のすばらしさを実感し、自分の妹に看護職を進めた」との後日談があり、看護に対する教育レベルが違っても学年に応じた学びがあると感じた。

1年～4年次での構成の方が学生自身が個々に自立した行動がとれ、学びが深まるのではないかと考えられる。

#### (2) コミュニケーションの問題

言葉の問題として、韓国での施設の見学では、日本語が話せるボランティアの方がいてくれたところもあったが、専門用語となると通訳は難しかった。本学の学生は英語だけでは十分に理解することができず、施設のかたが話す韓国語をソウル大学の教員や学生が英語に訳し、日本の教員が学生に日本語で伝えるというパターンであったため、かなり時間を要するものとなった。日本での施設見学では、韓国の学生に英語力があつたことや、本学の国際看護の教授が日本語から韓国語に看護の視点をいれて通訳をしたことで、十分なディスカッションができた。学生は言葉がわからないことでストレスを感じてしまいがちであり、韓国語から日本語にきちんと翻訳することができれば、もっと学生の積極性を引き出すことができたのではないかと反省している。

#### (3) 学生交流の継続性

学生は「韓国の学生と今でもメールでのやりとりをしている」「将来どこかでまた看護を通じて会うことができると思うと勉強の励みになる」と今後も交流を続けていきたいと話していた。夏休み期間を利用したため、お互いの講義に参加したり、多くの学生との交流場面は少なかった。今後は参加した学生が中心となり、ネット上での学生の情報交換や交流の場を作るなど、交流を継続できる方法を考えることも必要であろう。また、学生交流の機会は教員同士のコミュニケーションの場となり、相互理解を深めるきっかけにもなった。今後も継続して学生交流を続けていくにあたり、学生にとっていい環境作りと、学生の学びを共有するための方法を考えていきたい。

### 5. おわりに

今回のプログラムは、日本から韓国への訪問が最初であった。1日目、大分空港から韓国に向かう機内で、「前日は緊張して眠れなかった」という学生の言葉が聞かれた。が、空港ではプラカードを持ったソウル大学の学生の出迎え、ソウル大学のキャンパスには「Welcome Oita University」の横断幕、宿舎の部屋には一輪の花とウェルカムと、暖かい歓迎を受け、学生、教員とも一気に緊張がゆるんだ。その後も訪問する先々で多くの歓迎を受け、充実した日々を過ごす

ことができた。このプログラムに参加、協力いただいた大学の学生と教職員、施設の方々や地域の人々に感謝を申し上げたい。

---

著者連絡先

〒 870-1201  
大分県大分郡野津原町廻栖野 2944-9  
大分県立看護科学大学 保健管理学研究室  
桜井 礼子  
sakurai@oita-nhs.ac.jp